

第 3 回 札幌市立高等学校教育改革方針検討会議 議事録

日 時：平成 28 年 6 月 9 日 10 時～12 時

場 所：札幌市教育委員会 4 階 教育委員会会議室

出席委員：大原委員、岡部委員、手塚委員、近藤委員、山下委員、佐々木委員、鈴木恵一委員、濱野委員、石黒委員、林委員、鳴海委員、西川委員、尾崎委員、相沢委員、川嶋委員、土佐林委員

欠席委員：鈴木伸明委員

事務局：仙波教育推進課長、長谷川教育課程担当課長、小林高等学校プロジェクト担当係長、広川中等教育学校担当係長、幸丸高等学校担当係長、藤原高等学校担当係長、藤田学事係員

1 開会

2 事務局説明

仙波教育推進課長から、下記(1)、(2)、(3)について説明。

(1) これまでの議論など

○第 2 回検討会議では、ワーキンググループで整理した「市立高校の独自性と共通性」、「生徒の多様なニーズに応える特色ある教育」、「札幌の地域資源を生かした教育の展開」、「情報発信力の強化」の 4 つの論点で議論を行った。

○具体的には、「市立高校の独自性と共通性」では、市立高校全体で効率化を図り、浮いたリソースを改革に充てることや、高校同士の横の連携のみではなく、小・中学校との縦の連携も重要との意見があった。「生徒の多様なニーズに応える特色ある教育」では、学校間連携は他校の特色ある学びに触れることができる魅力的な取組である、各校の特色化が教員にとって過度の負担にならないような負担軽減の仕組みが必要であるなどの意見があった。

○高校改革は大きく 3 つのパートに分かれている。

- ①各校が持っている魅力をより発揮するための取組や学校間連携による多様な教育の提供
 - ②大きな市立高校という枠の中で、共通して実施する取組
 - ③基礎的な学力の保障を、市立高校としてどのように取り組んでいくかという部分
- また、これら改革の取組を支える仕組みを検討していくことになった。

(2) ワーキンググループにおける検討内容

○ワーキンググループでは、論点ごとに具体的な施策を整理。この施策ごとに課題等の洗い出しを行った。その中で、時間の制約が大きな問題となっている。(配布資料 4)

○ワーキンググループで検討を行っている中で、改革のキーワードが浮かび上がってきた。

①学校間連携と単位制

- ・各校が特色を充実させ、充実した特色による成果を自校だけで閉ざすのではなく全ての学校で共有し、他校の取組に興味を持った生徒がその良さを享受できる仕組みであるとともに、不適應を起こした生徒の救済という側面もある。
- ・全校を単位制にすることにより、他校との単位互換が容易になる。

②生徒や教員等の情報共有の場としての成果発表

③学校の活動を支える仕組みづくり

3 意見交換

各委員から出された主な意見は以下のとおり。

【改革の柱に関して】

- 基礎的な知識・技能のほか、知識等を活用する力、世の中の複雑な問題に立ち向かう挑戦する勇気、他者と意見を交わしその意見をまとめる力など、生涯にわたって使える力の育成が改革の柱となる。
- 多様性を認める学校群が目指す形ではないか。各校が特色を持ちつつ、その特色を市立高校全体に開放し、交流する。一定の基準を満たす生徒であれば柔軟に受け入れ、8校で生徒を育む学校群でありたい。そのような学校の中で、多様な生徒が交流し、刺激し合い、成長していくことが理想の姿ではないか。
- 「寛容さ（トレランス）」、「多様性（ダイバーシティ）」「共に育つ」がキーワードになる。
- 障がいのみならず、様々な障壁を超えて「共に歩み、共に生きる力」を育成していくことが求められる。平成30年度からは、高校でも通級指導ができるように制度改正が行われる予定であり、特別支援教育の視点も、改革の柱の一つとする必要がある。
- インクルーシブという考え方を幅広く捉え、学力であったり、家庭の経済状況であったり、様々な差異を超えて生徒が交流し、学び合うということは改革の柱になるのではないか。

【具体的取組などに関して】

- 学校間連携について、他校のユニークな学びを体験し、人生観が変わるような出会いがあるかもしれない。実施方法として、特色ある取組を行っている学校に生徒を集めるのではなく、出張授業や拠点校での実施などのほうが良い場合もある。
- 学校間連携について、学びたいと興味を持っている生徒に対して、様々な選択肢を与えることは非常に意義のあること。学びを求める生徒に扉が開かれていることが重要である。
- 発達段階に応じて、学びを求める生徒、主体性や意欲を持った生徒をどのように育てるかということも考える必要がある。
- 単位制には、科目の共通履修を促す側面に加えて、「学び直し」を促す側面もある。
- 教育相談体制について、個人情報保護の関係で、中学校から進学先の高校に生徒の情報が引き継がれないということがよくあり、情報がうまく伝わらないことで、サポート体制が整わず、退学してしまうということもある。市立の学校同士であれば引き継ぎが行われるような、連携の仕組みを作ることはいかないか。
- 成果発表の機会について、市立高校全体で「共通の取組」を行うために、「各校の情報を共有する」という考え方は素晴らしい。これについては、今まで実現できなかったことでもある。
- 高校間の横の連携ばかりではなく、小学校、中学校、高校という縦の連携も重要。「市立」だからこそできる小・中学校との連携が、道立高校にはない強みになるのではないか。

【各校独自で検討している今後の方向性】

- 新川高校は、現在、「進学型キャリア教育」として、基礎学力と社会人基礎力の育成に力を入れて

いる。公務員や看護師など、地域で活躍する人材の育成が新川高校の役目だと考えている。

- 平岸高校は、大きな変革ではなく、デザインアートコースの取組など、学校の中にある良い資源をより生かす方向で進めていきたい。また、良き市民を育てる、主権者教育にも力を入れていきたい。
- 清田高校では、27年度から今後の学校の在り方について校内で検討しており、清田の特色であるグローバルコースの学びを、普通コースにどう還元していくかなどが議題となっている。また、グローバルコースの良さを生かし、実験や観察を中心に課題探究を取り入れ、理系科目を学ぶことができるようにしたいと考えている。
- 藻岩高校は、若い教員が増えており、その者たちを中心として、学校の今後を考える自主組織が立ち上がったところ。様々な課題も見えてきたので、その解決に向け、今できることを一つ一つ行っていく。
- 啓北商業は、単位制に近い部分があるが、このことが「商業科」としての特色を薄めることにもつながっている。文科省の研究開発事業「スーパープロフェッショナルハイスクール」(※)の指定を目指し、校内で準備を進めている。

【その他】

- 生徒の学習評価の在り方について、テスト結果や課題の提出状況など結果に対する評価ばかりではなく、過去と現在の力を比較してどれだけ伸びているかなどプロセスに対する評価も取り入れていく必要がある。
- 道外の高校と人事交流を行っており、派遣された教員は派遣先で様々なものを吸収し、一回り成長して戻ってくる。市立高校間で、ある程度の期間（例えば半年程度）、教員の交流を行うことはできないか。様々なものを持ち帰り自校に還元する、そのようなことができれば良いと思う。

4 まとめ

＜大原会長＞

- 各校の特色、良さを生かしながら、生徒の主体的な挑戦を応援するという共通理解で検討を進める。
- 改革の中心となる学校間連携や成果発表、市立高校コンシェルジュなどの実施上の課題やその解決策、特色化の充実と基礎的な学力の保障をどのように両立していくのかなどについて、ワーキンググループで更に議論してもらおう。

5 閉会

次回の日程等について、事務局から連絡。以上

※スーパープロフェッショナルハイスクール事業

社会の変化や産業の動向等に対応した、高度な知識・技能を身に付け、社会の第一線で活躍できる専門的職業人を育成するため、先進的な卓越した取組を行う専門高校（専攻科を含む）を指定し、実践研究を行う事業